

保健の授業では、性感染症・エイズとその予防と家族計画の授業を担当させていただいた。どちらとも生徒にとって恥ずかしいという感情が伴う場合や答えづらい内容が多々あったため、発問の仕方を工夫して答えやすい雰囲気をつくることが非常に難しかった。例えば、家族計画の「将来、子どもを産み育てたいか」という発問をする場合、全員子どもが欲しいという前提条件を提示した上で、いつ頃、どれくらいの間隔で産むのかなどのワークに取り組ませると、生徒全員が授業に参加できるようになるとご指摘いただいた。また、教材研究により性感染症やエイズ、妊娠・出産に関する正しい知識はついてはいるが、経験が少ないため、リアリティのある話ができずに生徒に重要な語句を暗記させているだけの退屈な授業になってしまっていた。保健の授業でしか身につけることができない力を生徒に身につけさせるためにも、より良い授業をするためにも、もっと深く教材研究をするべきだと感じた。

体育の授業では、陸上競技ではハードル走、走り幅跳び、やり投げ、球技ではバスケットボール、体力テストの授業を担当させていただいた。体育の指導案は、屋外での授業の場合、雨天時の授業の展開も合わせて考えなければならない。そのため、途中で雨が降った場合の瞬時の対応が求められたり、前日や朝からこまめに天気予報を確認し、屋内はどこが使えるのかなども他の体育の授業を担当している先生方と話し合ったりする必要がある。指導案が完成した後、一度自分で動きを確認することは効果的だが、できる限り他の教育実習生などをお願いして、実際に人を動かして確認した方が改善すべき点がわかりやすくなると気づいた。体育の授業では、けがや衝突による事故、熱中症などの様々なリスクが存在し、命に関わる大事故が起きる場合がある。そのため、1秒たりとも気を抜かずに生徒の安全管理のために、やってはいけないことをわかりやすく、大きな声で伝えるという基本を忘れてはいけないということを実感した。事故は起きてからだと遅いため、事故が起きそうだと感じた場合はすぐに笛を吹いて、一度活動を中止させることが重要である。

提出の期限が定められているアンケートや水泳用品の購入の案内など、何度連絡しても忘れている生徒がたくさんいたため、朝や帰りのSHRで何度も確認することが必要だった。授業の感想でスライドが見やすかった、説明がわかりやすくて内容が理解しやすかった、楽しかったなど、良い点に関する感想がほとんどだったが、改善点を書いている生徒もいたのがうれしかった。例えば、スライドが見えにくいので、立つ位置は固定しない方がいいであったり、「エイズってどういう病気か知ってる？」という質問の後に内容に入っていくであったり、学習者である生徒目線でのアドバイスを参考にしながら授業改善を行うことが最も重要であると気づいた。

職員室は朝の職員朝礼の時くらいしか行かなかったが、学年団の担任が集まって校外研修当日の流れの確認、生徒への連絡事項の確認など、生徒のためにすることがたくさんあるため、ギリギリで出勤することはあり得ないことだと分かってはいたが、改めて学ぶことができた。他の時間は体育科の準備室で待機していた。部活動の朝練や授業の準備などがあり、7時にはほとんどの先生がきている状況だった。校舎内を巡回して教室に異常がないか点検したり、体育倉庫の整備をしたり、授業で使う用具の点検・補修作業をしたりとやるべきことがたくさんあるからこそ早くから学校にきていると知った。また、体育科の教師は、各教科の準備室や職員室の入退出時のマナーの指導や素行不良の生徒への指導など、授業外での生徒指導においても重要な役割を担っていると感じた。

課題は声が小さいことであったが、授業の回数を重ねていく内に自信がつき、次第に大きい声が出るようになった。最後の体育の授業では最初よりもすごく良くなったと評価していただいた。しかし、グラウンドなどの開けた場所ではまだまだ声が通らないと思うので、声を出す練習をして、教員になった時に大きな声での確かな指示が出せるようにする。

教育実習全体を通して、指導案の書き方、見やすくわかりやすいスライドの工夫、体育での生徒への指示の仕方、教員の仕事など、様々なことを学ばせていただいた。その中で共通していたことは、生徒のために根気強くやるべきことを見つけて実行するということであった。生徒のために何かをできない人は教員になるべきではないし、そのような人は見えていることにしか目を向けられず受け身になってしまう。このような教員にならないように、自分の授業を全うし、その他でやれることを見つけて主体的に行動し、生徒のために根気強く指導できるような教員になる。